

ネパールにおける体育教育の実情 (VI)

— 地域差に着目して —

松岡重信
(広島大学)

I. はじめに

これまでの報告は、ネパールの学校を中心に体育施設や教育事務所でのインタビューや観察に基づいて記述してきた。入手した諸資料も記述の材料となっている。それらは、われわれにとっては新鮮な情報であり、それらを記述し、残しておく事自体が目的である。

ネパール関連の日本文献は、既に旅行関係や地理学・民俗学・宗教論・調理・栄養・教育などを合せて60冊以上が出版されている。そして、今日的には単に遠方の秘境の国・ヒマラヤの国というイメージを脱皮し、比較的身近なインドの上の発展途上国といった承認のされ方が普及しつつあると言える。何故なら、1995年に日本からの直行便航空路(関西空港-上海-カトマンズ; 週2便)が開設されて、日本人旅行者やトレッカーが、相当多く入国している事実もある。さらに、テレビなども結構放送素材として扱うからでもある。

ただ保健や体育といふ教科領域は、非常に曖昧な状況がある。国家カリキュラムや教科としての法的制度的位置づけは明確ではあるが、現実には多様な実情が観察された。われわれが観察しただけでも、全く教科活動のない学校も、広場や用具などの体育やスポーツの実施条件をもたない学校も多く観察されている。その一方で、極々一部であるが宗教系の私学などでは、オール芝の広いグラウンドをもち、アメリカ人教師による体育授業やクラブ活動が活発に展開されている例も今回の訪問(1996/8/18~28)で発見した。これは、筆者にとっても非常に驚きであった。正直なところ、ネパールにかかわればかかわる程に正体がかめなくなっている。知れば知る程に解らなくなっている…という実感がある。

また、何のためのフィールドワークかという問いがあるとすれば、それは正体を知りたいだけという答えを準備する。が、今それをも含めながら、こうした

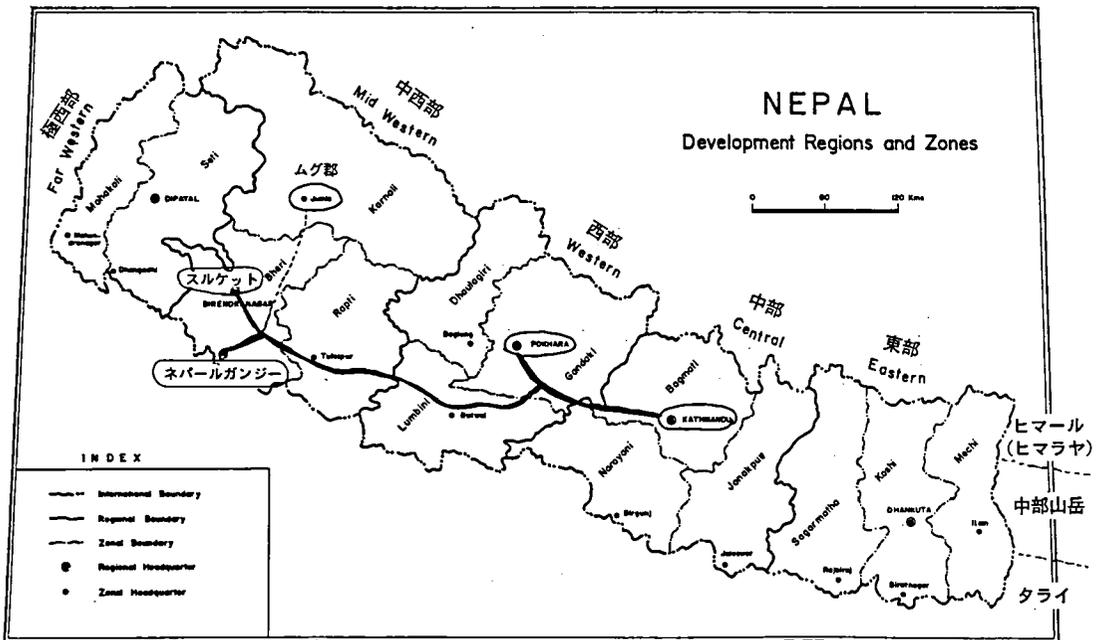


図1 ネパール全域と行政区及び調査行程

フィールドワークも、「ある時の」「ある場所の」という極めて「事例報告的」な性格は、どうしても免れないと自覚しつつある。そこで、そうした限界を明確に意識しつつ、今回は、夏場の雨期の季節で、観光旅行者も相対的に少ない時期を選んで、図1の地図に示したようなルートを選定し、教育事務所や学校を訪問し、体育の実情という観点から、記録を残そうとしている。少なくとも、第V報までは、首都カトマンズや、観光地ポカラおよびその周辺が中心であった。そこで、それらの都市部以外を観察し、体育にかかわる地域差を観察することが目的である。そして、比較的都市部の状況は、今も大きく変化しつつあることも含めて、概略は把握できたという思いもある。

また、加えていえば、いつも筆者の頭を離れないのは、ネパールの「ある時点」の「ある場所」の「ある風景」は、日本の「何時頃」の「どのあたりの風景か」という世俗のかつ常識的な問いがある。少し大袈裟に言えば、ネパールには、日本の「明治」や「昭和」や「江戸時代」の、「東京」や「北海道」や「広島」が混在しているとみなすことも出来る。そこから、逆に日本の教育システムの構築のプロセスの「すごさ」や、それ故の「問題性」が見えてきつつある気もしている。ネパールの人々の生活を感じつつも、ネパールという国が、教育制度を如何に整え、如何に自立した国家になるかという問題にかかわって個人的印象を言えば、単に経済的貧困だけが阻害要因であると決めつけることは出来ない……と、いう疑念をもちつつある。さらに加えて、例えば日本のような「教育立国」・「技術立国」になることが、いいことかどうか、将来的には問わねばならない問題と考えている。

何故なら、日本にもつい50年前あたり「アジアの最貧国・最混乱国」と呼ばれるような状況は認められた。そして、経済大国や技術大国となった日本が、何も経済的な問題を抱えていない訳ではない。さらに教育システムの問題も、例えばディスクール論が議論されるほど深刻化しつつある。学校不必要論や教科の再統合論も、わが国故のリアルさをもとうとしている¹⁾。だから、ことの善し悪しを単純にわれわれ日本人の物差しで問題にするのではなく、事実関係のみ、当面押さえていくことに努力を向けていきたいと考える。

II. 今回の訪問の目的とコース

雨期の時期のネパール訪問は、今回が2度目である。第1回目は、ユネスコAPEID事業がらみの訪問で、カトマンズに4日間滞在したのみである。が、今回は図1の地図上で、教育行政単位(東部・中部・西部・

中西部・極西部)と、高低差を基準にした表現で、「ヒマラヤ(ヒマール)」・「中部山岳」・「タライ(低平地)」を組み合わせてコースをあらかじめ設定した。「中西部(Mid western)」の「ヒマラヤ=ムグ郡」と、「中部山岳=スルケット」・「タライ(低平地)=ネパールガンジー」を事前に想定し、宿泊可能な場所と生命の危険を避けることを最低の前提に考えていた。但し、このコース設定や、教育事務所との交渉などは、長崎大学の金田女史との打ち合わせによる。地図上に破線で示したのが、出発前の予定コースであり、太線で示したのが実際に辿ったコースである。このコースの移動には、ナイト・コーチと呼ばれる夜行長距離バスを使った。

道路事情がよくないこと(山間部の道、ぬかるみ)、バス(インド製「TATA」)の性能もよくないこともあって、相当の時間がかかる。例えば、カトマンズ~スルケット(地図上で、直線的に計測すれば、それほどないが)400kmで、その移動に16時間が予定されている。それでもバス代金は200ルピーで、日本円にして400円程度である。もともと、山間の道路が主たるコースで、山裾にあわせて曲がりくねっている。従って、バスとてスピードを出せない。そして、実際の時間は、道路の側の山崩れで7時間の待機があり、23時間を要している。

結果として、教育事務所のあるスルケットとネパールガンジーが主たる訪問地ということになる。学校訪問に際しては、以下の要請をつけて学校訪問の許可を求めた。このような事務交渉の際、大学の学部長のサインと「朱印つきの研究協力依頼状」が、非常に有効であった。その要請の内容は、次のような項目である。すぐに叶うものもあるが、無理なものもあった。

- ①体育の授業に力を注いでいる学校を紹介して欲しい。
- ②体育云々の条件のない普通の学校を紹介して欲しい。
- ③子どもの遊び調査(金田女史分)をさせて欲しい。
- ④学校は私学でも国立校でも構わない。
- ⑤出来ればどの学校でも体育の授業を見せて欲しい。
- ⑥病院の状況も観察したい。

III. フィールド調査の結果

フィールド調査の結果を次の幾つかの観点から整理しておく。脈絡に欠けることは承知しているが、間違いなく「ある時点(1996.8)」の「あるポイント」の「風景」と「出来事」の記述である。

1) 交通手段について

ここでは、スルケットとネパールガンジーについて整理する。何故なら、ムグ郡には入れなかったからである。初めての訪問地であることと、現地で生活する協力隊員でも避けるナイトバス利用の旅で思わぬ経験をした。バスそれ自体は写真1にも示すが、非常によく使い込まれたボロボロの車体と、すり減ったタイヤを大事に使っている。バスは、インド製で、エンジン馬力は大したものとは思えないが、トルクが強く実にねばり強い動きをする。道がよければ100km/h近いスピードを出し、土道のぬかるんだ道路でも床をすらないように製造されている。日本の高速バスのような性能をもっていても、この国では全く用をなさないと思われた。交通事故も多く、幹線道路を走れば、平均200kmに1台くらの割合で事故車をみる事が出来る。それも、ほとんどがバスであった。

スルケットの街は、人口は郡内全域で30万人程度であるが、スルケット自体では4万人程度と推測された。スルケット近辺でのバス以外の交通手段といえば、長距離では軽飛行機がある。近距離ならば、バスか基本的に歩行である。荷はこびも基本的には人力である。ネパール特有かどうかは分からぬが、この人力による運搬法には大別して、1) 頭上運搬法、2) 台車に載せて押す方法、3) 天秤棒の両端に荷物をつるす、4) 前頭部に紐をかけて背中荷をおう方法がとられる。彼らの作業状況をみると、実に辛抱強く、実に勤勉である。一部に昼間から、バクチをする者も観察できたが、大きく重い荷をモクモクと運び続ける姿は、既に日本では珍しい風景になっている。日本の農家でも観察しにくくなっている。

都市部でみかける力車(リキシャ; 自転車で荷台とセットになっている)やバタンコ(エンジンつき三輪車)、まして普通乗用車はほとんどみかけない。バスも車高のかなり高い車台(50~60cm)で、乗り降り自



写真1 たくましいバス

体が、われわれにも相当きつと思われた。飛行機も1日数便のセснаがあるだけである。空港の周囲だけ有刺鉄線で囲まれた中央部に300~400m程度の滑走路がある。利用者は極々限られている。この有刺鉄線の中に牛が入っていたりするのでも大らかである。

スルケットの街への入り口にあるバスターミナルも雨でぬかるんだ状態で、バスは勝手放題の向きと位置どりをしている。さらにバス会社が複数(ネパール系とインド系)はいていて、客の取り合いをやるという状況も観察された。混沌とした商いの仕方や、それが時折警察沙汰になる。協調してルールを作って、ターミナルを整備しようとか、共通の切符販売所をつくらうとか…の方向に向かうのはかなり先の事であろう。

カトマンズからスルケットへのルートは、一部平野や国立公園を走るが、基本的にはいわゆる山岳地帯を走る。道路は険しい山裾をはしる道路以外に迂回路は一切ない。場所によってはオーバーハング状態の上に道があり、山側は、岩肌が幾筋もの層をなして波うっている。雨期には上層の土が水を含んで膨らむような状況がある。そして、上層の土砂が部分的に滑落するという土砂崩れが、雨期の時期にはよく観察される。事実、われわれもスルケットからヒマラヤの街、「ムグ郡」へのルートを探っていたとき、この時期は道路が閉鎖という情報で、ルート変更を余儀なくされた。さらに、カトマンズからスルケットへのルートでも、土砂崩れの為に真夜中山中で7時間の待機を余儀なくされた。乾期には何の支障もない道路も、一度雨期になり山間部に入ると寸断され、道路の上を濁流が走る。洪水や山崩れの度に幾人もの犠牲者が出ている。

橋の流失や道路の水没といったことは年中行事のごとき状態である。ただ、それでも道路周辺の住民自身がそれを大した問題と考えないのは、基本的に彼らは歩いて牛を追い、草を刈って、自分で背負ってかえるから問題になりにくい。が、バス会社や商売人にとってバスという脚は、唯一の命綱でもありうる。ただ、道路確保のための抜本的な工事は、素人ながら非常に難しく感じられたし、仮に技術的に可能でもコストの非常に高いものになることが想定された。

バス便は、屋根のフラット部分に相当の荷物をつんで走るのが通例である。われわれのリュックも屋根に上げられシートでカバーするだけであった。それでも、バス車内の通路は乗客の荷物でふさがれている。これが、ローカル線では普通の光景である。通路では、

脚を縛られた鶏が鳴いていたり、何かの穀物と思われる物が山積みになっている。それでも乗客は文句も言わず、その上を踏んだり、跨いだり、椅子代わりに使ったりしながら移動している。この風景も、日本の昭和20年代にボンネットバスでみた記憶がある。

鉄道は、タライ地方のインド国境に短い路線が少しあるだけで、特にこの国の中部山岳地帯の険しさを考えるとレール敷設は非常に困難なものを受けとめた。

2) スルケットの学校と体育

教育事務所の紹介を受け、スルケットの街では3つの学校を訪問した。そして体育の授業をみせて欲しいと頼んだ。

1校目は、中規模の高校で300人程度の小中高校生が朝の朝礼をしている場面を訪問した。やたら、集団行動めいた「並び方」や「まわれ右」「休め」のような号令で一斉に動く場面を作ってくれたが、体育の授業はみせてくれなかった。あるいは、この集団行動が体育の授業であったのかも知れない。ただ、バドミントンとバレーが出来るスペースとボールをもっていった。ここでは、ネパールの伝統的片足相撲を紹介してくれたので、筆者は日本流の相撲を紹介し、仕草やその意味を言うと、非常に喜ばれた。

次に、約40分歩いて訪ねた（暑くて実に辛い）高校は、規模が大きく、970人程度の小・中・高校生が通学している。コの字型に建設された平屋の校舎の中央部が、硬い草に覆われたグラウンドであった。見せてくれた体育授業は、教科書に出ているボール・ローリング・ゲームを、まさに教科書通りにやってみせてくれた。名の通りボールを転がして、リレーをするものであった。

第3校目は、純粋な小学校であった。ここでは全校生徒（約100名）に大歓迎を受けた。みんなで3重に円をつくり素朴なダンスを披露してくれた。田圃の片隅の純粋の小学校であり、周囲はトウモロコシの畑と、水路のあるところでは稲が栽培されていて、田植えからさほど日にちがたっていない。ここでも日本式の相撲を紹介したり、一緒にダンスをした。

通常、学校の通学エリアは定められておらず、親が気に入ればどの学校にでも通学可能という事であった。従って、学校の隣が自宅という者もいれば、何キロも遠方から歩いて通学している者もいる。行政（教育事務所）も、そこまで関与する能力はないという風であった。国立校といえども（ネパールでは国立か私立しかない）、小中高が混在している。従って、〇〇高校には、小学生も、いわゆる中学生も高校生も在籍していることが多い。

3) ネパールガンジーの学校と体育

スルケットから5時間ほどバスに揺られてネパールガンジーに入る。インドとの国境の街ということで、交易の税関や警察官・軍人がやたら目につく。タライ地方特有の高温多湿の大平原に街がある。ネパール即山の国というイメージから大きくはずれている。夕方小さなホテルを確保したのちに、金田女史の知り合いの女性校長を訪ねて、学校視察の援助を依頼した。この校長の学校（私立の女子校）と、校長の知り合いの国立学校を紹介される。校長の女子学校はグラウンドといっても、バレーがやっと可能な程度の中庭があるだけで、体育らしい授業も観察できない。他の1校は、750人規模で22人の教師で構成される国立校であったが、増設中の校舎工事の資材が山と積まれて、グラウンドは使用不可能であった。

途中にも、幾つかの学校を外から観察できたが、体育の授業がナショナル・カリキュラムに規定されるように実施されているとは、とても考えられなかった。

4) ネパールガンジーの国立病院の実情

女性校長の甥が、耳鼻科の医者をしているということで、国立病院を見学することを許された。外科手術室を見学することは、金田女史の研究テーマの1つでもあった。この医師は、患者をまたせたまま、われわれを案内してくれたが、先ずはそのことに驚く。この病院は、建物も3階建で、多くの患者が訪れている。中には、廊下に倒れ込んでいる老人もいるし、ことさらそれを誰もかまわない。また、ネパールでは、医師たちが相当の特権階級であることが感じられる。事実大半の医師は、インドやイギリスで養成されている。

断られると予想していた病室の見学も、外科手術室にもあっさり案内された。靴を脱いでスリッパにはきかえるだけで、手術室に入れたこともまた、新鮮な驚きであった。この国立病院は、18人の医師と70人の看護婦で運営され、この地域でのセンター的病院ということである。が、余程の病気にならないと、住民が近寄らない場所でもあるという。かといって、民間にたくさん医師がいたり、個人病院がさほどある訳でもない。何やら怪しげな祈禱士がいたり、民間の薬売りの行商も行われている。それも病院の前で堂々と…である。これも、スマートさはないが、日本の大きな病院の周囲に開業医がいたり、薬局があるのと似ているといえ言えなくもない。

5) 再度ポカラの観察

ネパールガンジーから、再度ナイト・コーチに揺られて16:00~明け方6:30にかけて、ポカラへ到着。

14時間半のバス旅は相当こたえてきている。途中何度か休憩したり、夜食をとったりしているが、野糞もしなければならなかった。時折、豹も出るという林の入り口に座り込んで、トイレをすませるのは相当に勇気が必要であった。ポカラは季節はずれではあるが、基本的に観光の街である。トレッキング用の防寒服や登山靴などのレンタル会社もある。ポカラの街では、自転車をかりて、以前からの数人の知り合いや野中体育隊員（金沢大学出身）を訪ねた。その日は土曜日で学校は休みの為に訪問できなかったからである。

明朝バスを乗り継いで、ベグナス村に入る。バスターミナルから約40分、登り坂道を歩きアマルシッド・ハイスクールを訪ねる。2年前ここに建設された「文化会館」の様子をみるため、東広島ユネスコ協会に報告する任を負っていた。校舎も増築中で文化会館も教師研修やシン・トレーニングに活用されていると管理人から聞く。後から駆けつけた高校の校長も、感謝や今後の希望を混みにして語っていた。ここでは、文化会館設立以降生徒の数が増えているという。しかし、その事が周囲の学校を圧迫している可能性も示唆された。次に来るときには、日本や広島を紹介するものを持参して欲しいとの依頼も受けた。

帰途、ポカラ・バス・センターに隣接した3階建ての大きな学校を訪ねた。金田女史の知り合いが校長ということで、体育の授業をみたいということ、校長が「お前体育をやれ！」と40歳くらいの男性教師に命令する。聞けば、やはりボール・ローリング・ゲームをやるということで、その教師についていると、40分ぐらいズーと教科書の説明をして、生徒が同じ事が言えるかどうかを問題にする授業をみせつけられる。この学校は広いグラウンド（草は強烈にはえている）をもっているが、どこにも草がはえている。何かの活動で踏みつぶされた箇所は玄関先ぐらいで、ここでもわれわれがもつイメージの体育的・スポーツ的活動は、みられなかった。現実的に、体育活動・スポーツ活動は、「ないに等しい」と判断された。

6) トリバンバン大学における体育のマスターコース設立計画²⁾

ポカラから首都カトマンズへの約200kmは、バスで7時間を要す。さすがに疲れ果てて飛行機にした。30分程度のフライトでカトマンズにつくが、\$60が必要であった。

もともと計画にはなかったが、カトマンズでは偶然に訪ね人（海外協力隊員）を捜して、宗教系の私立高校にいたことが判明して、その学校を訪問した。それが、先述した宗教系のものすごい学校である。そ

こで、実施されていたJOCV主催の教師教育プログラムを見学できる好機に恵まれた。

この時、トリバンバン大学のスタッフから体育のマスターコースの大学院構想が審査されている情報を得た。体育やスポーツのスペシャリストを養成することもくろまれている。が、現時点でこれがスタートするかどうかは分からない。審査4度目の挑戦というが、審査方法や基準も聞き取れなかったし、問題はそうしたマスターコースが必要な段階かどうかについても、筆者個人的には少し疑問が残らないでもない。

7) 日本の支援活動（教員研修）からみて

6)に述べた宗教団体が経営する高校では、オール芝の広いグラウンドやサッカーゴール、バレーボールの支柱、中高鉄棒、コンクリート製のバウンド板等、日本の学校に勝るとも劣らぬ施設が、広々とセットされていた。野球をやっている風景もみた。これはネパールでは初めてみた風景である。しかも、教師はアメリカ人ということで、ある程度納得した部分でもある。

その片隅で、JOCV主催の教員の体育研修（Teacher-training）が実施されていた。ここでは、海外協力隊体育隊員（澤田佳代子）の仕事ぶりを見学した。トリバンバン大学の助教授を講師に招き、講演やココ（追いかけてこの変形）というゲームやカバディーなどの実技研修が行われていた。参加教師は女性4名を含め総勢40人規模の講習会で、これに参加し、修了証をもらうことは、給料に幾らか反映するという。この給料目当ての参加を厳選するのが、結構気をつかう作業であるということである。

ただ、この宗教系の学校の子ども達は、研修に参加している教師達が講習を受けているようなスポーツやゲームはほとんどやっていない。ここに、既に一種の違和感がある。彼らこの学校の生徒たちは、もっぱらサッカーとバスケットや野球をやっている。既に、6年間ネパールに通って、計画にも入っていなかったポイントで、とんでもないものを見たという思いがある。これは、多分この学校の特殊性と理解せざるを得ない。しかし、ただ、豊かな階層の子ども達にとって、ココやカバディーといった伝統的ゲームは、ほとんど興味の対象とはなっていない現実がみられる。ココやカバディーといった伝統的ゲームは、近い将来には廃れゆくゲームかも知れないことが推測された。

個人的想いは色々あるが、長期的展望も体育・スポーツのマスターコースの計画も何もあったものではない。

8) 教育実習の一端をみて

ポカラのバスターミナル南の国立の高校を、教育事務所の紹介で訪ねた。学校が3階建のよく整備された学校で、教育実習の学生2人の活動をみる機会を得た。

ネパールの教育制度には、「プラス1」という制度があって、SLC（高校卒業検定試験、日本でいうセンター試験に該当）を得て、もう1年教員養成の訓練を受ける期間のなかに教育実習は位置づいている。

どう評価すべきは分からないが、男性と女性の2人の実習生は、共同で1つの教室に入り2人だけで授業を運営している。かなり騒がしい風景もあったが、指導する立場の教師はおらず、大らかと云えば、実に大らかであった。このあたりの整備は、将来問題化する可能性があるかと判断される。しかし、現時点では教員の給料が、さして高くなく、また教師の社会的認知もあまり高くない状況で、訓練過程だけ厳密にすることの意味も出てこない。それが、この風景に現れていると思われる。

この学校の校門には、アメやチョコを売る商売の女性たちがたむろしている。丁度小学校の部が、帰宅する時間であった。小さな「商い」が活発に行われていた。この風景も遠い昔（昭和20年代）に筆者も体験している。ポカラのような観光地でも、一旦郊外に出ると、ドカンと呼ばれるような「雑貨屋兼喫茶」も少ない。自転車とて誰にも普及しているものではないし、交通手段に乏しい。市場に出るには距離が遠く、交通手段も乏しい。学校の「外」はいい商いの場所でもある。

9) SLC 制度と体育からみて

先にも SLC の事にふれたが、この SLC には評価観点の教科として体育が明確に位置づいている。にもかかわらず、体育という授業の実施率は、われわれがみた範囲でもさほど高いとは考えられない。というより、ほとんど観察できなかった。いわば、体育という教科が、それぞれの学校で如何に扱われ、どういう地位を占めているかは、かなり低く、かつ関心の対象にはなっていない。これは、カトマンズやポカラのようないわゆる都市部も、スルケットのような山岳の中の小さな街の学校でも同様と考えられる。先のカトマンズの宗教系の学校が、むしろ例外中の例外である。スルケットやネパールガンジーという国境の街でも同様であると思われた。

そうした状況にも関わらず、つまり体育はほとんど実施されていない状況を含みながら、SLC のための点数枠は、明確にある。それは、合否判定に活用されている。SLC の試験会場は、以前に観察しているが、そこで直接体育の試験がある訳ではない。インタ

ビューしたところ、一種の「さじ加減」として、校長や教員の裁量の範囲事項ということである。これは、都市部・田舎を問わず、どうも公認の扱いで、政府もみてみぬふりを装っているとしか考えられない。制度的に固まらず、資金不足に加えて、教師達に気高き誇りも感じられないのが実情と言えそうである。ローカルな地域、スルケットやネパールガンジーは、まだそれでも街であるが、われわれが想定したような体育授業やスポーツの普及ということは観察出来なかった。それでも、「遊び」はどこにでも豊かである。「タイヤまわし」や「輪ゴム蹴り（「ツング」と呼ばれて、自転車のチューブを切って束ねたものをリフティングして遊ぶ）」はよく観察した。

IV. 終わりに

地域差をみたいという思いで、首都圏や観光地を離れ、ローカルな地方（中西部）の訪問を試みた。予定に反して、ムグ郡には近寄れず、いわゆるヒマラヤ地域を観察していない。が、仮に近づけても、2日間は荷を担いで歩かねばならなかった…と、いう。

結論的にはスルケットやネパールガンジーも、ネパールではローカルではあっても、基本的に「街」であった…といわねばならない。学校の様子や体育という教科の実情は、今回初めてみたような特異のケースもあったが、このローカルのスルケットやネパールガンジーと、カトマンズやポカラとの比較では決定的な差異は見つけられなかった。

しかし、カトマンズやポカラの都市部では、あちこちにバレーボールのコートがあったり、ときおりサッカー場やバレーボールをプレイしている姿は観察できた。その点、ローカルでは「体育」とか「スポーツ」の姿がほとんど見えない…と、いうのが実感である。都市部では一部ではあるが、スポーツの現実にぶつかれる。が、今回はそれがほとんどみられなかった。

決定的に、カトマンズやポカラと異なるのは「空気の匂い」である。スルケットやネパールガンジーは、牛糞のにおいはあるが、排気ガス臭さはまだ少ない。

文 献

- 1) 山本哲士：学校の幻想教育の幻想，pp. 205-269, ちくま学芸文庫，1996
- 2) Tribuvan University Faculty of Education Master of Education in Physical Education, 1996 Report.
10頁におよぶ計画書であるが、文献の出所から考えて、インドやアメリカをモデルにしていることが伺える。